

---

 書 評 ・ 紹 介
 

---

Samuel H. Preston, Patrick Heuveline and Michel Guillot

*Demography: Measuring and Modeling Population Processes*

Blackwell Publishers, 2001, 291pp.

大学院でゲーム理論の勉強をしていたとき、「先端的な研究が学問を開拓していく一方、良い教科書がその成果を普及させる。両者相俟って初めて学問として体系的に成立する」ということを指導教授から言われた。なるほど、Nash や Neuman らによる黎明期では評価の定まらなかったゲーム論が、ミクロ・マクロ経済学といった伝統的な理論と併記されるほどにまで急速に普及したのは、国内外で優れた教科書に恵まれたからであろう。特にジャーゴン・バリアの高いデモグラフィーには優れた教科書が必須である。もちろん、我が国が特段それに乏しいのかと言えばそうではない。「形式人口学」(館稔, 1960年)は、専門書あるいは教科書としても金字塔的存在であると評者は思うし、また「人口分析の方法」(館稔, 1963年)もコンパクトで良いのだが、いずれも現在では古書でもない限り入手不能である。また「人口分析入門」(山口喜一他, 1989年)や「人口統計学」(岡崎陽一, 1999年)も入門書としては適当なのだが、本書のような外国文献を手にするたびに、やはり我が国では中級・上級レベル、少なくとも大学院レベルのテキストが手薄であることを常々痛感するのである。つまり、数理的な展開を逃げることなく、それでいて実践的な計算手法を習得できるテキストである。欧米における Preston, Pressat, Brass, Keyfitz, Coale などに比肩する書き手は我が国にもいるはずなのだが、相対的に読者層が薄いということが原因なのであろう。高度な数学は到達可能な水準も高くするのであるが、それだけ理解可能な読者を自ずから限定してしまい、販促上採算に見合わず出版されにくい。結局、必要に迫られた研究者や学生は、英語というハンディを押ししても、技術の習得を本書のような外国文献に依ることになってしまうのは残念である。

本書の構成内容について触れておこう。第1章では、人口の定義、またコーホートや延べ年など人口統計学で多用される指標、さらに人口方程式や増加率などの成長分析、また第2章では年齢標準化やレキシス図など構造分析の基礎が導入されている。第3章では死亡による単要因減少生命表について、第4章では複合要因減少表が中心であり、ここは本来ならかなり高度な数学の知識を要求されるところだが、比較的分かりやすく、補論的な第12章の A. Palloni による増減生命表の解説と合わせ読むと、多相生命表の実践的な計算が可能である。第5章は出生と再生産のテーマであるが、コーホート出生率や出生間隔分析など、入門レベルのテキストでは落とされがちな内容もポイントをつけて説明されている。ただ、近年よく議論されているコーホートと期間の出生率の関係などについてももう少し言及すべきであろう。第6章はコーホート要因法を中心とした人口推計だが、数値例が実践的で良い。行列を使った表現も多角的に把握しやすい。第7章では安定人口理論は、数式展開にやや粗さがあるが、概念的な意味は良く捉えられ、これが第8章における年齢構造の不安定問題を理解するのに生かされている。第9章では人口動態事象の年齢別発生パターンのモデル化である。古典的には、標準化やモデル生命表、コーホート要因法などには必須の知識であるが、近年ではシミュレーションなどにも有用である。いわゆる Preston-Coale の  $r$  変数推定法をテキストレベルで学ぶには本書を読む他ないであろう。第10章は、人口データの質を評価について論じている。データの信頼性が劣ったり、調査制度が未熟な地域はもちろん、我が国のように発達した地域においても、細かいこととはいえ看過できない問題である。そしてこれが次の11章では不完全データを基にした人口推計法の議論へと繋がる。どうやら本書は、Shryock and Siegel "The Methods and Materials of Demography" とともに、デモグラファーの標準的マストブックとなることは間違いのないであろう。

(和田光平／中央大学)